

2020. 8. 1 (日) マタイ26:30~35

26:30 そして、彼らは賛美の歌を歌ってからオリーブ山へ出かけた。

26:31 そのとき、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたはみな、今夜わたしにつまづきます。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散らされる』と書いてあるからです。

26:32 しかしわたしは、よみがえった後、あなたがたより先にガリラヤへ行きます。」

26:33 すると、ペテロがイエスに答えた。「たとえ皆があなたにつまづいても、私は決してつまづきません。」

26:34 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに言います。あなたは今夜、鶏が鳴く前に三度わたしを知らないと言います。」

26:35 ペテロは言った。「たとえ、あなたと一緒に死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」弟子たちはみな同じように言った。

<説教>

過越の食事の最後には〈賛美の歌〉(30)すなわち「ハレル」と呼ばれる詩篇(115~118篇等)が歌われたと考えられています。

恵み深く、力強い勝利者、救い主である神に感謝し、神を賛美して過越の食事は終わったのです。

それは毎年、毎度のことではありましたが、この最後の過越の〈賛美の歌〉は殊更に力強いものだったでしょう(何よりもイエスご自身が一番力強く歌われたことでしょう)。

何故ならイエスの十字架によってついに本当の過越が実現しようとしていたからです(当時の弟子たちはそのことまではまだ理解していなかったでしょう)。

そのようにして〈彼らは賛美の歌を歌ってからオリーブ山へ出かけ〉(30)しました。

〈そのとき、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたはみな、今夜わたしにつまづきます。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散らされる』と書いてあるからです。〉(31)

〈今夜わたしに〉とは「今夜わたしの身に起こることの故に」という意味ですから、「その夜イエスが祭司長、民の長老らの手に引き渡される(更にはその後十字架につけられて殺されることも含めて)が故に」ということです。

〈『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散らされる』と書いてある〉とはゼカリヤ13:7の引用です(ヘブル語原典の直訳ともまたギリシャ語訳とも違ってきます)。

「羊飼いを打て」と神が〈剣〉に命令する形で書かれているところを「わたしは羊飼いを打つ」とイエスは言い換えられました。

それによってイエスは天の父なる神の御意思(みこころ)を解き明かされたのです。

「〈羊飼ひ〉(明らかにイエスのことです)が人々に引き渡され、苦しみを受け、殺されることはわたしの御父がなさること、御父のみこころなのだ。」更には、「それは羊飼ひの弱さ無力さのように人間の目には(なによりもまずあなたがたの目には)見えるだろう。しかし実はそれが御父のみこころであるが故に敗北ではなく神の勝利、わたしの勝利なのだ。今はわからないだろうが。」そうイエスは言われたのです。

さて、羊は〈羊飼い〉に（他の同じ羊仲間にはなく）従って行くのですから〈羊飼い〉が打たれいなくなれば〈羊の群れ〉（ここでは明らかに弟子たちのこと）は〈散らされる〉こととなります。

それがここでは〈つまずき〉と言われ、すぐ後でペテロには〈鶏が鳴く前に三度わたしを知らないと言〉う(34)ことだとイエスは言われます。

そしてそれはついには〈弟子たちはみなイエスを見捨てて逃げてしまった〉(56)という文字通り“散々（さんざん）”なことことになるのでした。

ではペテロを初め弟子たちがこのようにイエスにつまずくことは預言されていたことで、仕方なかったこと、当然のことだったと開き直って良いのかと言えばもちろんそうではありません。

彼らはイエスにつまずいた自分たちの罪を悔い改めなければなりません（彼らは後にそのようにしました）。

しかしここで何よりも大事なのは、イエスにつまずいたそんな弟子たちをイエスがあわれみ回復なさるということです。

〈散らされ〉たご自分の弟子たちをイエスが再びお集めになる、というイエスのみこころ、お約束、みわざです。

「しかしわたしは、よみがえった後、あなたがたより先にガリラヤへ行きます。」(32)とイエスは言われました。

これです。これがこの箇所が一番肝心なところです。

〈「たとえ、あなたと一緒に死ななければならぬとしても、あなたを知らないなどと決して申しません。」〉とペテロが言い、〈弟子たちはみな同じように言った〉(35)とすぐ後にあります。

この“力強い”言葉からは人々に引き渡され苦しみを受け十字架につけられると言われるイエスと〈一緒に死ななければならぬ〉くなることへのペテロたち弟子たちの恐怖がむしろ感じられます。

しかしイエスは「わたしはよみがえる」とここで宣言なさいました。

〈死〉を恐れ、イエスを見捨てて逃げてしまうようなペテロを初めとする弟子たちの〈今〉の〈夜〉に、心の暗闇にイエスはよみがえりの光を当てられたのです。

そして「あなたがたより先にガリラヤへ行きます」と言われました。

〈ガリラヤ〉はイエスが宣教を始められた地であり、また弟子たちをお召しになった地でした（マタイ4章）。

「わたしについて来なさい」というのがイエスの召しの言葉でしたから、イエスが〈先に〉行き、弟子たちがその後に従うというのがどこまでも正しい姿勢なのです。

そして、「〈散らされ〉た〈あなたがた〉もまた〈ガリラヤに行〉くのだ、このわたしの故に〈散らされ〉た〈あなたがた〉をこのわたしが〈ガリラヤ〉に再び集めるのだ」とイエスは約束してくださったのです。

マタイの福音書 28:16 以下にあるように、その〈ガリラヤ〉の山でイエスは弟子たちに新たな命令、使命をお与えになります。

イエスを知らないと言ったペテロにイエスは〈ガリラヤ〉湖畔（ティベリヤ湖畔）で「わたしの羊を飼いなさい」「わたしに従いなさい」と改めてお命じになりました（ヨ

ハネ 21 章)。

このようなイエスの再度の召し、命令を受けて弟子たちは〈あらゆる国の人々〉の所へ使わされて行くことになります。

〈今夜〉は打たれるイエスの故につまずき、イエスを見捨てて散々に散らされた弟子たちでしたが、やがては復活のイエスの故に、イエスの御意思とあわれみととりなしの故に(ルカ 22:29-32)、今度は死をも恐れずイエスに従って全世界に散らされて行くことになったのです。

人間に引き渡され、苦しみを受け、十字架につけられたイエス・キリストは今の時代も多くの人々にとってはつまずきであり、愚かです(「よみがえり」を信じなければなおさらです)。

しかし召された私たちにとっては復活のイエスが(神の力、神の知恵)(I コリント 1:24)であり、イエスがすべてにおいて先に立って行かれ、私たちはその後に従い、〈十字架につけられたキリストを宣べ伝え〉るのです(I コリント 1:23)。